

アートマネジメント実践講座特別レクチャー

「よりよい芸術に出会うために ～プロジェクト事例からのアプローチ～」

日時 2012年1月17日(火)19:00～20:30

会場 愛知芸術文化センターアートスペースE・F

小原啓渡(アートプロデューサー)

1960年兵庫県出身。舞台照明家として活動後、1999年アートコンプレックス1928を立ち上げ、プロデューサーに就任。劇場プロデュースの他、「文化支援ファンド」の設立や造船所跡地をアートスペース「クリエイティブセンター大阪」に再生するなど、芸術環境の整備に関わる活動を続ける。他にも、文化芸術を都市の集客や活性化につなげる数々のプロジェクトを打ち出している。2006年、指定管理者として大阪市立芸術創造館の管理運営を始め、館長に就任。2009年、大阪府府民文化部参与に就任。



=====

1. 施設の運営とプロデュース

—アートコンプレックス 1928、大阪市立芸術創造館、クリエイティブセンター大阪、AIR 大阪

私が文化芸術の世界に入ったのは舞台照明からで、照明家として20年くらい仕事をやりました。最後の7、8年はフランスの振付家のカンパニーにいて、1年のうち3、4ヶ月はヨーロッパを中心にツアーという生活を送っていました。カンパニーが解散したので、日本で腰を落ち着けて仕事をしようと思った時に始めたのが、京都の「アートコンプレックス1928」です。ここは元・毎日新聞社京都支局で、1928年に建てられた近代建築のビルです。かなり老朽化して取り壊す話が出ていた1998年に、私がたまたま日本に帰ってきたわけです。設計者が、京都市役所や図書館、京大の時計台などと同じ、武田五一という有名な建築家であったため、潰すのはもったいないじゃないかという声もありました。私はヨーロッパで古い近代建築や建物をうまくリノベーションした新しい情報発信の場を沢山見ているのですから、これは残すべきだと思います



た。そこで私の友人が買い取り、運営していく上で私と彼が新しい会社「有限会社一九二八」をつくり、私がプロデュースしていくことになりました。これが1999年のことで、以来、私はいくつかのアートスペースのプロデュースをしています。

「アートコンプレックス 1928」はコンプレックス＝「複合」をテーマにしています。ジャンルにとらわれず、ジャンルを飛び越える複合的なものから新しいものが生まれてくることを期待しています。実は私はもともと歌舞伎フリークで、歌、舞、わざ、外連（けれん）がある歌舞伎というのは、日本が誇るコンプレックス・アートだと思っています。その「コンプレックス・アート」をひっくり返して「アートコンプレックス」と名づけました。

次に、大阪市立芸術創造館ですが、ここは、劇場の他に、レッスンスタジオ、音楽スタジオ、録音スタジオなど11くらいの部屋があるインキュベーションセンターで、現在、私の会社が指定管理者として運営を任されています。

そしてクリエイティブセンター大阪（略称CCO）。ここは2004年に始めました。近代建築をリノベーションしてアートの発信地を目指したアートコンプレックス 1928 がわりと上手く行って、まちづくり的にも何らかの影響を与える形になりました。そこで次はもう少し大きいものがやりたいと思っていました。やはりヨーロッパで、産業遺産といわれる広大な建物や敷地一帯をアートという切り口で開発したケースを多く見てきたので、そういうものを日本でもやりたいと思っていました。たまたまあるパーティーで知り合った社長さんから造船所の跡地が残っているという話を聞き、見に行ったら非常に気に入って、安く借りてアートの拠点にしていこうという動きを始めました。建物の中に劇場やギャラリー、カフェスペースを作り、半野外もあるのでそこも活用していろいろなイベントを行っています。



コンセプトはクリエイティブ・ファクトリー。元々船という巨大なものを作っていた場所なので、今は製品ではなくてコンテンツを作って出荷していく発信していく工場としています。最近作ったのが、「GEAR-ギア-」というノンバーバル・コンプレックス・パフォーマンス。今年の4月から本格的にロングランをやる予定です。

加えて、CCOの近くに古い旅館がありまして、女将さんが亡くなって継ぐ人がいないということで、そこを借りてセルフメイドで内装を全部作り変え、アーティストが長く安く泊まれる宿、「AIR 大阪」を始めました。AIRは「アーティスト・イン・レジデンス」の略です。アーティストが安く長く泊まれる場所を作ることです。当初は私がずっと管理部屋に泊まり込んでいました。色んな人が来るので面白いです。各々の部屋には何も置かず寝るだけにして、あえて共有スペースは豪華に居心地のよい空間にしました。みんなが共有スペースに集まるようにしたんです。キッチンもあったから、毎日、今日はオーストラリア料理だ、タイ料理だ、

インド料理だという風に、パーティーみたいになりました。アーティストはお金がない人が多いのでここで儲けるのは難しい。それよりいかに安く長く泊めてあげるかというのが大事だと思いますので、そんな運営をしています。

2. プロジェクトの企画

ー「300DOORS」、「プロジェクションマッピング」、「水都大阪のラバーダックプロジェクト」

施設の運営以外では色々なプロジェクトをやっています。たとえば「300DOORS」。これは300もの様々なジャンルのワークショップばかり集めたフェスティバルで、今年が5回目。テーマは「好奇心を応援しよう」です。たとえば、カルチャーセンターだと、ちょっと興味があっても、入会して料金払って毎週曜日が決まって通わなければいけない、となると受けるまでにはエネルギーが要ると思うんです。それをもっとステップを低くして、興味はあるけどなかなか受けるところまで辿り着けないという人のために用意したワークショップの見本市、それが「DOORS」です。1時間半で一つのワークショップのさわりの部分が体験できて、受講料はすべて500円。しかもノンジャンルに展開しますので、自分の様々な興味に合わせて気軽に体験してみることができます。

また「プロジェクションマッピング」といって、建物の壁など、街自体に映像を照射していくプロジェクトも2004年から京都・三条通りで始めました。先日は京都市美術館の壁面でやりました。単に壁面に映像を当てるだけでなく、その建物用に完全にカスタマイズして投影します。



一番多いときには72箇所、プロジェク

＜岡崎・あかりとアートのプロムナード＞京都市美術館(2011年10/27(木)～10/30(日))

ションマッピングを街の中で行い、夜の空間を変えていきました。いろんな作家に映像を作ってもらっています。来年あたりからコンペティションにして、みんな決めていきたいなと思っています。

話題になったプロジェクトとしては、「ラバーダックプロジェクト2009」があります。「水都大阪2009」の関連事業として、オランダのアーティスト、F・ホフマン氏の作品「ラバー・ダック」を、大阪・中之島付近の河川上に展示しました。「国境は人間がつくったもので、鳥には国境なんてない」というのがコンセプトです。私がこの作品を気に入ったのは、美術館や劇場に自分から足を運んで観に行くまでのモチベーションはない

方々に対して、アートが外に出て行くことで、観ようと思わなくても自然と目に入ってきてしまう状況を作ってしまうところなんです。

そしてこれを見て誰もアートだって思わなかったんじゃないかな。「おー」とか「えー」とか「かわいい」というのが感想だと思います。私はアートの根本的なところにあるのは、1つは解放だと思っています。つまり人間は肉体だったり常識だったり法律だったり既成概念だったり色々なもの



<ラバーダックプロジェクト 2009> 水都大阪 2009 八軒家浜会場
(2009年8/22(土)-9/27(日))

に縛られていますよね。そこに、こういうもの

をパッと見たときに、つまり常識ではお風呂に浮かべる程度の大きさのものがいきなり10メートル以上の大きさにバン！と出てきたときに、今まで自分をガジガラメにしている呪縛のようなものが、パーン！と弾けるんじゃないかなと思います。と言っても実際見たときは誰もそこまでは考えないと思いますが、「あ、こんなものもありか」ということです。そこに呪縛からの解放があります。

このアヒルの展示に関しては、行政と民間で行いましたが、実は行政は一銭もお金を出していません。行政がやったことはいろいろな規制緩和です。たとえば通常川の中にこんなものを設置することは許可されませんが、条件を整えれば置けるように許可を出す。こういう仕事は行政しかできない。この展示は反響を呼んで、大阪府の「おおさかカンヴァス推進事業」という、色んなところでパブリックアートを点在させていくプロジェクトに繋がりました。

3. より良い芸術に出会うために～芸術、創造性、感性

ここからは今日のテーマ「より良い芸術に出会うために」に沿った話をしていこうと思います。

まず、いきなりですが、芸術、アートというものは何なのか。アートと言うと現代美術など絵画的なものをイメージされる方も多いと思うのですが、私は、基本的に「意図的に行われている創造性のある活動と、その活動によって生まれたもの全て」がアートだという捉え方をしています。では次に、創造(クリエイティブ)とは何かということになるのですが、これについてはずっと考えていまして、20年くらい前から色々なアーティストに「あなたにとって創造とは何ですか？」という質問をぶつけてきています。今も続けていて、もう200

人近いアーティストに聞いていると思います。最初に聞いた方々の分が『クリエイター50人に聞く、創造の原点』（論創社、2005）という本になっています。これは本当に難しく、何だろうとずっと思い続けながら色々な人に話を聞いて考えてきました。この創造というキーワードを自分の中で紐解くために出てきたのが「感性」でした。もし今「感性とは何ですか」と会場の皆さんに訊いても、恐らくそれぞれ違った答えが返ってくると思います。そのくらいこの抽象的な言葉は一人ひとりの捉え方が違うでしょうが、私が考えた感性とは「違いを見分ける能力」です。何処まで細かく違いを見分けることが出来るか、ということではないかと考えています。

たとえば、今ちょうど愛知県美術館で「ポロック展」をやっていますが、私は昔照明をやっていたこともあって、赤というだけでも沢山の種類があることがわかります。ちょっとした光量の違い、フィルターの色の違いで、同じ赤でも違う。画家もそうだと思いますが、普通の人が見たら同じように見える赤い色でも、非常に細かな違いを見分けることができる。その能力が感性だと思っています。



そして感性が能力であるなら高めることが出来る。感性とよく似た言葉に感受性があると思いますが、感受性はどちらかというと先天的なものが多く、一方感性は後天的なものが多いと私は思います。そして感性を高めていくことによって、創造性が刺激されると考えています。

では感性はどうやって高めていくことが出来るのか。それには、自分がすごく好きだったり興味のある事に徹底して関わっていくことが非常に大事なのではないかと思います。子供の教育の話でも、対象がなんであれ好きなことをとことんやらせることで、違いを見分ける能力が備わっていく、育っていくのではないかと。大人になっても、自分が好きなものをとことん突き詰めていくことが感性を磨くことにつながると思っています。

私もこれまで色々な仕事をさせてもらっていますが、基本的には好きな仕事をしています。興味があってやりたいことだと仕事のクオリティが違ってくる。とはいえ、パレードの法則というのがあるように、8対2、8割は自分がやりたくないことをやって2割は自分がやりたいことができたなら十分かと思っています。とにかく絶対2割は自分の好きなことをする。100%じゃなくても、そういう努力を惜しまなければ、大人になっても感性が高まっていくのではないかと思います。

もうひとつ、感性というのは感染すると思います。なので感性の高いものに触れるようにすることも大事です。また、感性は一時が万事というところもあって、ある1つのものを追求して感性を高めた人は、自分の専門分野ではないものに対しても、同じように高い感性が働くということがある。音楽を突き詰めた人は絵画を見ても他のものに対しても違いが分かる力があるんじゃないか。専門分野じゃないので違いの原因は認識できないが、違うというのは分かる。アートマネジメントにおいても、技術や知識を備えるのも大事だと思いますが、経験も大事で、そこに人との付き合いというものが出てくる。感性、見分ける力というものは、人を見分ける力としても発揮できると思います。ぜひ自分の感性を高めるという意味でも、いろんな芸術活動であったり、芸術作品に触れていく機会を持っていただきたいと思っています。

このように、今、私が仕事上いつも考えているキーワードが、「クリエイティビティ（創造性）」と「感性」の2つです。そして創造性、感性というものは、アートの世界に限られるものではなく、今の時代どんな仕事に

就いていても一番大事だと思うんです。どんな職業でも創造性のある人は、成果が出せると思います。またそういう人は元気であったり、ビビットであったりします。

創造性に関連してですが、クリエイションには色々なパターンがあると思いますが、私は、どれだけ一旦無くす、捨てることが出来るか、から始まると思います。そこからどう作り上げていくか。「スクラップ&ビルド」、壊して作り直すという言葉がありますが、私は壊すよりも無くしてしまおう。どこまで無くすかが、次生まれてくるものの斬新性やインパクト

に関わってくるのではないかという考えです。先ほどのポロック展の例でいうと、絵画の創作風景の映像があったのですが、クリエイションをする様子は一種の無になっているように見えました。何かに集中して入り込んでいる状態、他に何も見えなくなっている状態、創造するのにふさわしい状態だと思います。創造を考えたときに、本当にゼロから作ることは稀で、たいがいのものは何かの新しい組み合わせだったりする。ただ、どこまでゼロの状態に持って行って新しく作るかというのが一つのポイントだと思います。



先ほども感性の話をしました。やはり興味のあるものに対しての興味を持った自分を大切にしたいと思っています。興味の一歩手前が好奇心だと思います。興味はそこまでないが、何となく気になるとか、何となく面白そう、という好奇心をまず大事にしていくと、それが興味になり、興味が大きくなって感性というものがより高まる。その感性をもってクリエイティブな創作をしていく、クリエイティブに生きていくことができる、という流れが出来るのではないかと考えています。その流れを自分の中で常に意識しながら、その流れの中で、自分ができること、やれること、機会を設けていくことができるのか。それが私の仕事のテーマであったりやり方であったりしています。

Q:新しく人と出会うコツは？人を引き寄せるコツがあれば教えてください。

小原:私は偶然が好きなんです。よくよく考えてみると、どれを考えても偶然だと思うんです。たどっていくとあの人に会ったから・・・ということが、数えればキリがなくて、偶然の連鎖のようです。私の場合偶然が色々なことを導いているのは確かだと思います。偶然というのは何かメッセージがあるんだと、何かがあるような気がしていて、偶然を大事にしよう、そうして会った人を大事にしようという気になります。それが相手に伝われば、相手もきっと同じように思ってくれるんじゃないかと思っています。他人というのは鏡みたいなものですから。そこから色々なことが展開したりするのかな。たとえば、街で知り合いを見つけたら、「おーい」って、呼び止めます。そこまでしなくても良いと思いますが、偶然だから何かあるのかな、と思って走ってでも行きます。そういったところが人付き合いに繋がっているのではないかと思います。